

アドルフ ウィンダウス賞を受賞して

名誉教授 奥田 九一郎

去る九月十五日ドイツ国 Freiburg 大学医学部の内科学教授で Windaus 委員会のコイディネーターである Gerok 博士から一通のファックスが届いた。そこには Falk シンポジウムの Adolf Windaus 賞委員会は貴方を本年度の Adolf Windaus 賞受賞者に決定したと簡単に書かれてあった。そのことを Björkhem 教授に話すと大変喜んでくれて、

いますぐにでもシャンペン・パーティーをやらうと言いだした。しかしもう遅かったしそれはお断りしたら翌日教室の全員を集めてパーティーを開いてくれた。Björkhem 教授のグループだけのささやかなパーティーかと思っていたら三十〜四十人もいる教室（臨床化学教室だからいろいろな分野のグループがある。教授の数も複数）の全員が集まって来て午後三時頃からシャンペンをあけてパーティーをやるのだから吃驚した。日本なら勤務時間中に酒を飲むなんてもつてのほかだという投書でも入って、ただでは済まない事になるかもしれない。あまり日頃口をきいた事もない人々までそばにやってきておめでとうといつてく

れるのには恐縮した。外国人である私にこれほど祝福してくれるとは思ってもいなかった。学問上の業績は人種や宗教の違いを越えて世界の人々に歓迎されることを如実に知り生涯学問に身を捧げて来た者の幸せを感じるとともに、学問の本場であるヨーロッパではいかに学問上の業績を大切に行っているかを知り感動した。

Adolf Windaus はビタミンDの構造を決定し、世界から佝偻病を追放した人である。その功績によって彼は一九二八年ノーベル賞を受賞している。ドイツが誇る近代生化学者の一人である。私にとって彼の名は特に印象深い。私が彼の名を最初に知ったのは今から四十年程まえ岡山大学医学部の学生だった頃である。生化学教室の清水多栄教授は生化学の講義の時 Wieland（一九二七年胆汁酸の研究でノーベル賞受賞）と Windaus 教授のことをよく口にされた。前者は先生がドイツ留学中（約七十五年前）師事された先生であり、Windaus はその畏友でありともにステロイドの生化学の研究をした人達である。清

平成三年三月本学歯学部口腔生化学講座を停年退職。同年四月から、スウェーデンのカロリンスカ研究所で客員教授として研究中。

水先生がこの二人のことをまるで神様のようには話されるのをよく聞かされたものである。一九八〇年に Falk シンポジウム組織（胆汁酸研究に関する国際シンポジウムの組織で二年に一度国際集会所が開かれる）の中に Adolf Windaus 賞が設けられ、胆汁酸に関する顕著な研究に対して授与されることになった。今年第十二回目のシンポジウムで Windaus 賞は第七回十人目にあたる。

本賞に推薦されたということは三月頃聞いていたが、その後全く通知がないし殆ど諦めていた矢先であった。知り合いのあるアメリカ人教授によれば、推薦された十人ほどの中では私は有力な方であるが他にも何人か有力な人もおり樂觀は許されないとのことであった。前回「ウサギがカメになった話」（一九九〇年広大フォーラム）にも書いたように、コレステロールが分解して胆汁酸になる酵素の中でもとりわけ大事なコレステロール7 α -水酸化酵素を精製し、その構造を分子生物学的に決定したのはわれわれであった。しかし半年程遅れてアメリカの二つの研究室からも同様な報告があった。もっとも彼らは私達の報告を引用しているので実際は私たちの結果を確認したということにしかならないと思



うのだが、そこが英語がお手のもののアメリカ人のことだからうまく書いて原著雑誌に載せることに成功したのであろう。一旦原著雑誌に載った以上先取権を主張するのは当然かもしれない。彼らの論文原稿の審査にあたっては査読者の見識が低かったとしかいいようがない。近頃では私達の名が落ちている論文や抄録が出てくる始末である。さらに人種的偏見や宗教的偏見あるいは学閥意識が加われば私の受賞など淡い夢に帰してしまう可能性も十分にあった。たとえ受賞ということになっても彼らとの共同受賞ということになるのではないかと思っていた。しかし授与式の一ヶ月前になっても何の音沙汰もないのでほとん

ど諦めていた矢先に通知がフアックスで来たわけである。委員会ではどんな議論があったか知るよしもないが相当な激論が戦わされたらしい。受賞決定後知り合いのアメリカの教授から受賞おめでとうという言葉の後に「君が受賞を喜ぶのは結構だが受賞できずに落胆している人もいるという事実は認識しておいて欲しい」と記した手紙を戴いた。それがどういう意味で書かれたのか未だによく分からない。

Baselでのシンポジウムは去る十月十二日から一週間開かれ、参加者は三千人位で日本からも七十人位来ておられた。胆汗酸部会の参加者は八百人位であったが専門分野の国際集会としては大変多い方といえる。十月十四日の最終日に授与式があった。冒頭にCarole教授が挨拶された。いくら胆汗酸の専門家とはいえ臨床教室の教授であるから通りいっぺんの挨拶をされるものと思つて初めは余り注意もせずその後で行う受賞講演のことなどを考えながら聞いていたが、そのうちこれは大変な講演だと分かり慌てて緊張して聞き直した。終わった時は胸が震えるのを覚えた。教授は、私がこの三十年間一貫して行つて来た研究をすべて理解しその価値を認め、それにもとづいて本年度の受賞を決定したと結ばれた。臨床講座の教授がここまで深く酵素化学や分子生物学を掘り下げて私の仕事を理解してくださると思ひもよらなかつた。人種的偏見や学閥にとらわれず、ただ科

学的真実を尊重しそれを顕彰していこうとする崇高な動機だけが感じられた。その後私の受賞講演になった。私は心ゆくまで私達の成果を論じ、協力してくれた教室の人々や他の研究者への謝辞を述べることができた。出席しておられた日本のある大学の教授は「先生の講演には日本語の説明の入ったスライドも出て来て大変楽しかった」と言ってくださった。(私自身は気がついていなかったのだが、受賞決定が遅かったのと、他に用事が重なったので日本で使っていたものをそのまま使ったので日本でも使っていたものが幾つかあった。他にも何人か私の講演をエンjoyしたと言ってくださる人がいた。後日手紙で受賞講演を褒めるとともに私がこの賞を受けるにまさによさわしいと書いて来られた委員の方もおられた。受賞式のあとFalk社の社長がWindaus lunchと称してBaselでも一流のレストランに招待してくださった。そこにはFalk社長、社長夫人、令嬢それに委員会のメンバーの方々が列席しておられた。お昼からワインを呑みながらの豪華な食事に、同席した家内や次男夫婦はまるで映画のようだと大変感激していた。ただ単に賞状や賞金を与えるだけでなく、こうして家族までよんで歓待するというのはこちらでは当たり前なのかもしれない。科学の進歩に貢献した人をこうして優遇するということは取りも直さず科学の進歩をいかに重んじているかの証拠といえよう。